

福祉言語学の新たな実践

一限界集落における方言調査を事例にー

谷ロジョイ(静岡理科大学)

1. はじめに

本稿は、発表者が静岡市北部の井川地区¹において行っている調査を事例とし、「福祉言語学² (ウェルフェア・リングイスティクス) の新たな実践」の可能性について報告するものである。

徳川 (1999) は、ウェルフェア・リングイスティクス (Welfare Linguistics) ³を「社会福祉および個人の幸福の増進に寄与する言語コミュニケーション研究」とであると定義している。徳川は、「言語研究が楽しい、真理の追求をしていればいいと言ってばかりいずに、それも大切ですが (徳川, 1999, p.90)」と前置きした上で、言語研究によって得られた成果が社会に還元されることで、福祉を実現する必要があると述べている。これに対し、本発表で扱うのは、研究成果ではなく、調査のプロセスそのものが、福祉をどのように実践できるか、という点である。

「ウェルフェア・リングイスティクス」という概念は、言語研究によって得られた専門的知見や成果を、社会課題の解決のために応用・展開するための暗喩として用いられ、その対象は、「言語弱者」または「情報弱者」であることが強調されている (平高, 2013)。これは、徳川 (1999, p.90) における対談の中で、ネウストプニー氏が「福祉という言葉が使われているから、弱者を対象にしている点に特色がある」と述べている点からも明らかである。一方で、本発表で扱う事例における対象者は、「言語的な弱者」に限定していない。

また、ハインライヒ (2013, p.19) は、「ウェルフェア・リングイスティクス」を提唱した徳川は、言語によってもたらされる不均衡の是正を図り、「社会全体の相互利益を模索する方法を考えていたのではないかと述べている。言語研究に携わる立場から、対象となる個人やコミュニティの「言語生活」の向上、あるいは、「情報保障」に主眼が置かれるのは当然であるが、ここではより広く、ウェルフェア (福祉) という点から、言語研究が調査協力者の暮らしの質向上にどのような貢献ができるのかという点について考える。

本発表では、これまで論じられた「ウェルフェア・リングイスティクス」とは、異なる観点から、言語研究を通じた福祉の実践について、以下の点から考える。

- (1) 研究によって得られた成果ではなく、フィールド調査自体が、対象となる個人の生活の質やコミュニティのあり方を改善する形を模索する。
- (2) 対象は、「言語的な弱者」あるいは「情報弱者」のみならず、広く「言語研究に関わる個人や集団」とする。
- (3) 調査協力者 (あるいは、コミュニティ) の「言語生活」にのみ焦点を当てるのではなく、調査協力者の生活そのものを豊かにする調査手法を検討する。

2. 限界集落における方言調査

ここでは、本発表で扱う事例について、調査地および調査手法の概要を述べたい。井川は、南アルプスの山々や険しい溪谷に囲まれており、1950年代半ばに井川ダムの建設工事が行われるまでは、車道も整備されていなかった。そのため、長く他の地域から隔絶されており (森竹 1974) ⁴、中部地方では唯一、話者がアクセント知覚を有さないな

¹本発表における「井川」とは、旧・安倍郡井川村を指す。1969年に静岡県静岡市に編入し、2005年より葵区となっている。

²「福利言語学」、「厚生言語学」など複数の語が用いられるが、本発表では、「福祉言語学」とする。

³徳川 (1999) は、この理念について、経済学者・哲学者であるアマルティア・センによって提唱された「ウェルフェア・エコノミクス (Welfare Economics)」から着想を得たと述べている。これは、ミクロ経済学的分析手法を援用し、社会福祉の評価を体系的に行う経済学の主要な研究領域 (Deardorff, 2014) である。

⁴井川では、江戸時代から金の採掘や木材の加工・運搬が行われており、周辺地域との交流がまったくなかったわけではない (宮本, 1975)。

ど、周辺の中部方言とは異なる言語的特徴が見られる（中條, 1982; 図1 参照）。また、語彙や語法には、上代東国方言の残存が見られ、これまでも多くの調査が行われてきた。

井川では、急激な人口減少が続いており⁵、井川方言の衰退・消滅が危惧されている。また、高齢化率も高く、子どもは6名（小学生は3名、未就学児3名）であることから、その継承は極めて困難であることが予想される。

発表者は、2020年から、井川において方言調査を行っている。地域活動の参与観察などに加え、個人面接調査によって、①短文の読み上げによるアクセント調査、②静止画の描写による語彙および音韻調査、③共通語から井川方言への言い換えタスクによる語法調査を実施している。発表者は、こうした調査を継続する中で、複数の問題があることに気がついた。

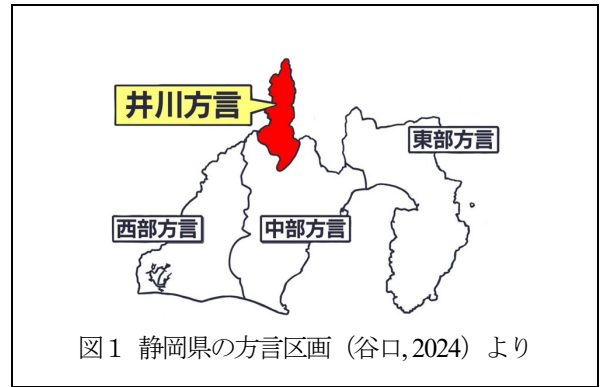


図1 静岡県の方言区画（谷口, 2024）より

・調査協力者への負担：

宮本・安溪（2008）は、調査の侵襲性について多くの事例をあげた上で警鐘を鳴らしているが、上記のような調査もまた、協力者の貴重な時間や労力の犠牲の上に成り立つものであると言える。中でも、①のアクセント調査は、話者の方々が、かつて受けた母方言への否定的評価を想起させる。この点については、先行研究においても指摘されており、例えば馬瀬（1980）には「国語の授業で教科書を朗読するたびにアクセントについて注意された。他のことと違いこれだけはどうにもならなかった。私はだんだん無口になった（p.14）」といった記述や「静岡の高校で井川出身の生徒が初めて卒業式で答辞をした。しかし、途中からアクセントがおかしいと言って生徒がスクス笑い出してしまい、厳粛な雰囲気は壊れ、こんな悲しい思いをしたことはなかった（p.14）」というものがあつた（下線は発表者による）。また、発表者が行ったアクセント調査においても、キホさん（匿名, 1938年生まれ）は以下のように述べている。

引用1 [00:27:14]

キホ： 私たちのときは、戦争が終わるとき、大事な、子ども時代をずっと、その小学校1年生のとき敗戦になったんだけど、だから、ラジオもないから、なんにもないから、井川の人だけで働いてるから、あの一、生活してたから、発音っていうことは全く分からないから、高校へ行くと、話をすると、わあって笑うの。なんで笑われるのか分からないと、その中には、あの、誠実な子もいて、あんたたちは笑うのはどういうことだね、井川から来ただから、分かんないだから、親切にあげて、教えてあげればいいでしょうって、意見を言ってくれる子もいるけど、教えてくれても分からない。

・調査手法の問題：

①のアクセント調査は、先行研究に倣い、「雨が好きだ」「飴が好きだ」といった短文の読み上げを依頼していたが、これらの文は、話者の母方言では使用されない同音異義語（雨・飴、熱い・厚いなど⁶）を多く含んでいることが分かった（谷口, 2024）。例えば、「雨」は「オシメリ」、「飴」は「アメンダマ」、「熱い」は「アチイ」、「厚い」は「アツッカ」というように、話者の言語生活においては異なる語が用いられる（引用2 参照）。このような言語実態を考慮せずに実施されたアクセント知覚の判定は、方法論的に妥当でない上に、共通語こそが唯一の規範的な言語であるという価値観の押し付け（札埜, 2017）になっていたのではないかと危惧される。

引用2 [00:29:41]

キホ： あついは上等の句で、あちいなって。

あちいっちゅうやつは、あの、あつ（熱い）ほうの、火のほうのあつ。あつつかのほうの、あつかっちゅうかな。ものがあつ（厚い）のはあつか。

⁵ 静岡市統計書令和5年版によれば、井川方言が用いられる5集落（井川、岩崎、上坂本、田代、小河内）の人口・世帯数は、382人（256世帯）である。

⁶ 「雨」は「オシメリ」、「飴」は「アメンダマ」、「熱い」は「アチイ」、「厚い」は「アツッカ」のように表現される。

3. 新たな福祉の場と実践

前節で述べたような問題意識から、発表者は、わずかでも研究成果をコミュニティに還元したいと考え、研究成果を分かりやすく可視化した印刷物など、「プロダクト」の制作に取り組んだ。その際には、井川方言を母方言とする地域住民の方々（主に 80 代以上の話者）と問題意識を共有した上で、定期的に協議の場を設けることとした。本節では、このような相互作用的な「プロセス」そのものが、図らずも、個人の生活の質的向上に寄与している可能性について述べたい。

高齢者の社会的孤立は、生活の質低下につながり、心身の健康を損なう要因として、大きな社会問題となっている (Fujiwara et al. 2022)。こうした背景から、高齢者が、社会と接触・交流できるよう支援する試みは、さまざまな国や地域で行われている。例えば、イギリスには、「リンクワーカー」と呼ばれる職業があり、高齢者と地域活動をマッチングさせる役割を担っている。発表者が、地域住民と協働で行っている方言の継承活動も、高齢者の社会的交流やつながりを担保する場となっているが、本発表では、高齢者の「与える」という行為に焦点を当てて、「新たな福祉言語学の実践」としての方言調査について論じたい。



図2 老人会で紙芝居の試作を読む話者の方

六車 (2012) は、「介護民俗学」という新たな概念を提唱した。

「老いや病による絶望感、喪失感を抱えている利用者が、昔語りをしているその時には喜びを感じてくれている (p.20)」ことから、介護の現場に民俗学の「聞き書き」と呼ばれる手法を導入している。

従来の福祉領域における「傾聴」や「回想法」もまた、高齢者の健康増進に効果があるとされてきた。しかし、六車 (2012) は、民俗学の「聞き書き」という手法が、こうしたものとは本質的に異なることを指摘している。「回想法」では高齢者が「支援を受ける側」という立場にあるのに対し、「聞き書き」では高齢者が「情報を提供する主体」として能動的な役割を担うとされる。

方言調査も同様に、学術的営為において、高齢者は貴重な知識や経験を「与える側」として主体性を発揮する。こうした観点から、発表者は、高齢者との共同作業を通して、井川方言の記録・保存・教育・啓蒙といった活動に取り組んでいる。一例として、以下のような実践を行なっている。

- ・「井川昔語りの会」の開催：生活の知恵や工夫、生業、古くから伝わる民話を共有し、記録として残す活動を行なっている。

- ・印刷物制作に向けた協議：若年世代が井川方言に親しめるような絵本や紙芝居を制作するため、協議の場を設けている (図2)。

- ・「辞書を作る会」の立ち上げ：地域コミュニティが利用できるリソースとして、井川方言のオンライン辞書を整備するための準備を進めている。

4. まとめ

これまで井川では、多くの言語学者が調査を行ってきたが、そのどれもが、短期間、単発で調査地に滞在し、データ収集を行う fly-in-fly-out⁸と呼ばれる調査であった。Cochran et al. (2008, p.22) は、このようなアプローチについて著書の中で「研究者はまるで蚊のようだ。血を吸うだけ吸って去っていく⁹」というアラスカ先住民のことばを引用し、批判している。また、Moje (2000) は、「研究者の役割として、知を産出するのみならず、研究協力者の方々の生活に肯定的な変化を与えるため、そして、協力者自身が望み、自ら表現するような変化をもたらすために、研究活動に携

⁷ Aked et al. (2008) は、高齢者が心身ともに健康であるためには、「与える (Give)」行為が重要であり、「与える」ことで、自己価値や幸福感といった肯定的な感情が生まれると述べている。

⁸ fly-in-fly-out とは、鉱山開発の際、近郊に町を建設するのではなく、都市部から労働者を飛行機で移送し、数週間ごとに勤務と休暇を繰り返す労働形態を指すが、転じて、単発の調査を表す語としても用いられる。

⁹ 発表者による翻訳。原文：According to an Alaska Native saying, 'Researchers are like mosquitoes; they suck your blood and leave.'

わるべきである¹⁰」と述べている。

ハインリッヒ (2021) は、ウェルフェア・リングイスティクスを「言語教育を通じた社会変革のための理論的・実践的アプローチ (p. 34)」と定義し、コミュニケーションにおいて生じる構造的抑圧や社会的排除のメカニズムを同定し、周縁化されたコミュニティならびに個人に対する支援的介入の必要性を訴えている。しかし、その理念を実践、あるいは応用した事例は、依然として限られている。

本稿では、消滅の危機にある地域方言の記録・保存活動における高齢者との協働的实践が、世代間交流の機会創出および社会関係資本の醸成に寄与する可能性について論考を展開した。さらに、個人のアイデンティティと密接に結びついた「母方言について教える (=与える)」という行為が、福祉言語学の新たな実践として位置づけられる可能性について検討を行った。

謝辞 調査にご協力くださった井川の皆様に深謝する。本研究は、科学研究費基盤研究 (B)「方言衰退・消滅のメカニズムとその可視化-静岡井川の危機方言を事例として (24K00065)」、科学研究費基盤研究 (A)「方琉球沖永良部語を中心とした消滅危機言語の記録保存と継承保存を並行して進める研究 (24H00092)」、アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究 (jrp000267)」の成果の一部である。

参考文献

- Aked J., Marks N., Cordon C., Thompson S. (2008). *Five ways to wellbeing: communicating the evidence*. New Economics Foundation. London.
- Cochran, P. A. L., Marshall, C. A., Garcia-Downing, C., Kendall, E., Cook, D., McCubbin, L., & Gover, R. M. S. (2008). Indigenous Ways of Knowing: Implications for Participatory Research and Community. *American Journal of Public Health*, 98(1), 22-27.
- Deardorff, A. V. (2014). Terms of Trade: Glossary of International Economics. *World Scientific Books*, Singapore: World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd.
- 札埜和男 (2017). 法廷における方言 和泉書院
- Fujiwara, Y., Nonaka, K., Kuraoka, M., Murayama, Y., Murayama, S., Nemoto, Y., Tanaka, M., Matsunaga, H., Fujita, K., Murayama, H., & Kobayashi, E. (2022). Influence of “Face-to-Face Contact” and “Non-Face-to-Face Contact” on the Subsequent Decline in Self-Rated Health and Mental Health Status of Young, Middle-Aged, and Older Japanese Adults: A Two-Year Prospective Study. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 19(4), Article 4.
- ハインリッヒ, パトリック (2021). ウェルフェア・リングイスティクスとは 尾辻恵美・熊谷由理・佐藤慎司 (編) ともに生きるために ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育 春風社, pp.11-35.
- 平高史也 (2013). ウェルフェア・リングイスティクスから見た言語教育 社会言語科学 16(1), 6-21.
- 木本幸憲 (2021). 変化する社会への適応方法としての「危機」言語—フィリピンのアルタ語の活性度と消滅プロセスから 社会言語科学, 23(2), 35-50.
- 馬瀬良雄 (1981). 言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響 国語学 125, 1-19.
- 宮本勉 (1975). 史料編年井川村史第二巻 門真: 名著出版
- Moje, E. B. (2000). Changing our minds, changing our bodies: power as embodied in research relations. *Qualitative Studies in Education*, 13(1), 15-42.
- 森竹廉太郎 (1974). 井川村史 井川村史刊行会
- 六車由実 (2012). 驚きの介護民俗学 医学書院
- 中込敦士 (2024). 社会的孤立・孤独感が健康やウェルビーイングに及ぼす影響. 医療と社会 34(1), 49-57.
- 中條修 (1982). 静岡方言の研究 静岡: 吉見書店
- 谷口ジョイ (2021). 静岡県井川方言に見られる言語変異・変化 日本方言研究会研究発表会発表原稿集, 113, 25-32.
- 谷口ジョイ (2024). 福祉言語学の再構想 社会言語学, 24, 1-10.
- Taniguchi, J. (in print). The Linguistic Shift in a Language Island: Changes in the Community through Research and Language Revitalization Project. In: Hammine, M. and Rudolph, N. (Eds). *Transcending language education in Japan: Borderland accounts of being, becoming and belonging*. Bloomsbury.

¹⁰ 発表者による翻訳。原文: Researchers should engage in research not only to produce knowledge but also to make positive change in the lives of those who participate in research, change that the participants desire and articulate for themselves.